

各流佐伯氏

大分郡高田庄

山津村の佐伯氏

さとう たくみ

(会員 佐伯市池船町)

一、初瀬井路の功勞者・清水与兵衛

初瀬井路は大分川下流域を潤す井路のなかでは最も大きな規模をもっている。大分郡庄内から水を引き込み府内城下まで総延長は三六・四キロにも及ぶ。第一期工事にあたる荏隈えのくま郷井手は戦国末期に大友吉統によって起工された。

第二期工事の阿南庄井手は江戸初期、慶安三年（一六五〇）に当時の府内藩主日根野吉明によって築造された。吉明は家士清水与兵衛・大山助左衛門に命じ、正月十六日に着工、延べ九万三千余人の人力を動員し、わずか四

十六日間で総延長一六キロを完成したという。

後世の「昔語り」には、落成の日に水門を開けたが水が通らず、普請奉行の清水与兵衛は責任を償って自刃した。その翌日には水が蕩々と流れ、里人は与兵衛の死を悼んで初瀬地藏の小祠を祭ったという。また難工事に人柱となった娘「お初」の名を取って初瀬井路と名づけた……と。

二、山津村大庄屋清水氏

初瀬井路の功勞者清水与兵衛は大分郡高田庄山津村の大庄屋の次男で、府内藩主日根野吉明に知行百石で召し抱えられた藩士だったという。

与兵衛の自害にはそれなりの理由があったのであろう。これほどの大工事になると曰く因縁がつきやすい。たとえば、延岡藩の家老藤江監物けんぶつは岩熊井堰いせきの工事で失脚し、獄中で父子共に非業の死を遂げた。また我が佐伯藩にあつては、小田井堰・鬼ヶ瀬井堰に功績のあつた小林九左衛門が、ざん訴によって家祿を失い一家離散の憂き目に合っている。

山津村は初瀬井路の恩恵を受けられる地域ではないが

百姓人夫が庄屋の割付によって出役したという。与兵衛の自害が要因したのか定かではないが、山津村大庄屋は苗字を清水から佐伯へと改めている。大庄屋の名跡を考えると余程の事情があったかと思われる。百年後に再び清水姓に復したのは、初瀬井路の功績が讃えられるようになって与兵衛の名譽が回復されたためであろうか。

【棟札・文書類に残された大庄屋名】

寛保 三年（一七四三）……………山津村庄屋・佐伯彦三郎

（千歳東海寺文書）

延享 四年（一七四七）……………大分郡大庄屋・佐伯作左衛門

（内藤家文書、千歳役所建具疊品々覚帳）

安永 二年（一七七三）……………大庄屋・清水惟貞

庄屋・清水基寛

天明 四年（一七八四）……………山津大庄屋・清水友八郎

文化 元年（一八〇四）……………山津庄官・清水平之允

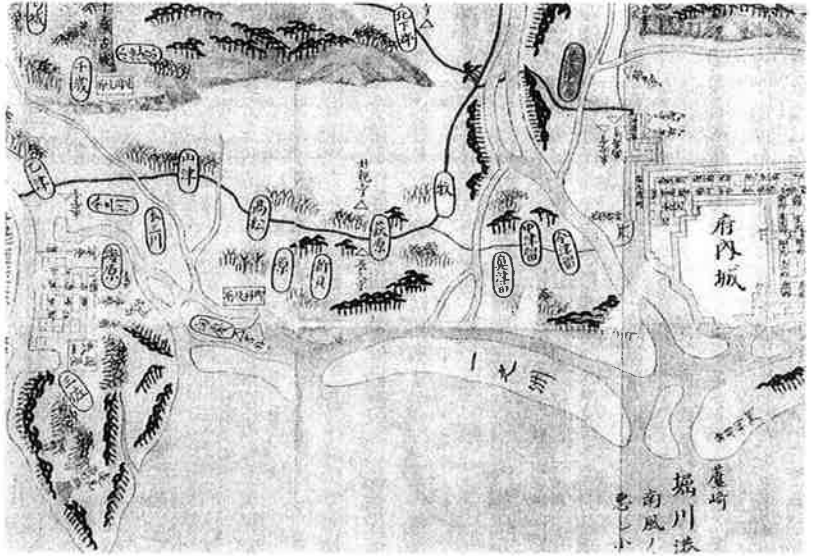
文化 二年（一八〇五）……………大庄屋・清水周四良

文化 五年（一八一八）……………大庄屋・清水作左衛門

文政 四年（一八二一）……………大庄屋・清水作左衛門

（千歳天満社棟札）

天保 二年（一八四〇）……………大庄屋・清水又佑



（大分郡絵図）

天保一五年（一八四四）……………番庄屋・清水丈之助

大庄屋・清水又佑

寛文六年（一六六六）幕府領

天和二年（一六八二）日田藩領

（薬師寺岩男文書）

貞享三年（一六八六）幕府領

嘉永二年（一八四九）……………大分郡大庄屋兼帯・清水又佑

安政三年（一八五六）……………大庄屋代勤・清水万吉
（千歳天満社棟札）

安政三年（一八五六）……………大庄屋・清水友八郎
（鶴崎市史人物編）

文久三年（一八六三）……………山津庄屋・清水丈之助
（薬師寺岩男文書）

慶応四年（一八六四）……………大分郡大庄屋兼帯・清水友八郎
（県立図書館蔵、旧藩神社明細帳）

三、延岡藩領山津村

山津村は大分郡高田荘に属し、大友吉統が改易された文祿二年（一五九三）以降は秀吉の蔵入地、関ヶ原合戦後は幕府領としてめまぐるしく統治者が代わった。

寛永三年（一六二六）松平忠直賄料地

慶安三年（一六五〇）幕府領高松代官支配

寛文五年（一六六五）肥後熊本藩預地

江戸中期に延岡藩領が成立したのは正徳二年（一七一二）のことで、牧野成史が延岡八万石の領主として入封したことによる。それまでの延岡藩は二万三千石だったので不足分を日向国・豊後国内に飛び地として所領を持つことになったのである。

牧野氏は正徳二年（一七一二）十月に高松で領地の引き渡しを受け、山津村に役所を置いた。三年後役所は隣村の千歳せんざいに移り、千歳役所は幕末まで延岡藩の豊後支配の中心だったという。

延享四年（一七四七）延岡藩主が交代し内藤氏が七万石で入封した。大分郡大庄屋・佐伯作左衛門は千歳役所の建物を牧野氏の代官から内藤氏の代官への引き渡しに立ち会った。十二棟の建物があつたという。

四、岡の清水家の由来

我々が山津村大庄屋・佐伯作左衛門のことを知ったのは延岡藩の『延陵旧記』によってである。当時、汐月三

代吉氏・宮下良明氏らと現地を訪れたが、地理不案内のため佐伯家の所在を確認するには到らなかった。

ところが数年前、柏江の知人が大分市岡の清水家と縁戚になったのを契機に、当地の清水姓が佐伯家と有縁の一族であることを知った。

岡地区は高城駅の南側、都市化の波に洗われた市街地を見下ろす丘陵地にある。この地区の伝承をまとめた「岡のあゆみ」によると、この地の清水姓は山津村大庄屋の分家で、現在では清水姓が二六軒・佐伯姓が三軒とほとんど同族で占められている。

大正期に建立された元祖墓には次のように刻まれている。

●清水祖 釋宗園 墓

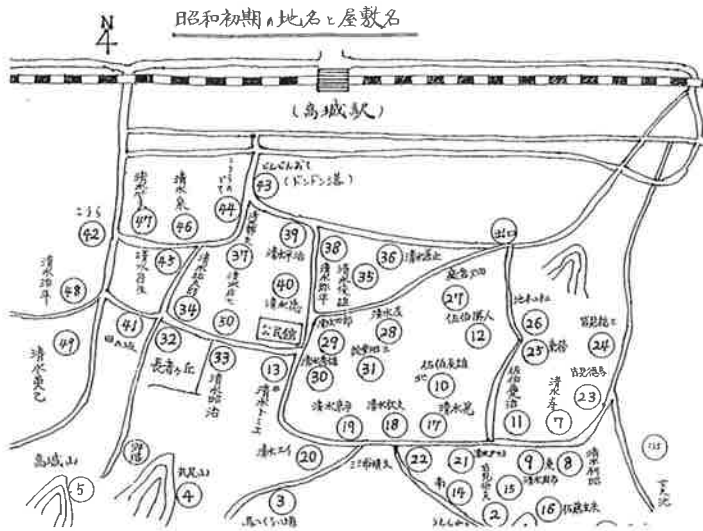
宝永六歲己丑十一月一日没（一七〇九）

これ清水姓の祖先は大神和泉守惟高で、天正五年まで十五代佐伯城主として在す。故ありて国を退き山津村清水邸に閑居す。このとき兄弟三子あり、すなわちその兄たるなり。

岡東園に來たりて八代の間、佐伯を称す。また宝曆五年に清水姓に改め、以後分家の分宅まで皆、清水を名

乗り來たることまた久し。（口語訳）

大正十一年壬戌七月十三日奉建 清水友雲翁謹書



（岡地区の佐伯氏・清水姓分布）

そのほか「岡のあゆみ」には、先祖の由緒書など数編が収録されている。

一、清水と改氏せしは

天正中、薩那島津軍勢の爲、佐伯城臼杵城次々落城に及び戦利あらず臼杵平清水逃走す。此処に大刀を洗ひ氏を清水と相改め、大分郡山津邑に落付き代々農を以て業とし庶民と化する。

子孫代々此の邑の里正相統せり、其後子孫繁昌して近郷に散居す。

清水氏本家

大分郡高田庄山津村

正保丙戌三年五月 大庄家清水與兵衛惟行

萩原大庄屋格

岡甚左衛門殿（萩原岡家記録ニ依ル）

大神氏由緒（清水氏の祖）

一、寛平四年壬子三月、大神朝臣庶幾爲大野郡領、従六位下。

或ハ曰ク、寛平四年二月太宰府言、豊後介大神良臣よしおみ再ビ任ヲ既ニ満チ、其職ヲ去ルニ当リ、百姓惜ミテ

留ルヲ請ヒ、其子庶幾こゑちか之ヲ許ス。即チ庶幾ヲ以テ大野郡領ト爲シ外従六位下ヲ授ケ、遠世郡領トナル。

（以下略）

右は同族清水家に伝わる巻物の冒頭部分である。また天保四年（一八三三）山津村岡原の清水兼治によつて写された『藤丸文化鏡』には

惟春これける（佐伯惟治）の弟左衛門督惟則これのりは大分郡山津村に來たりて蟄居し子孫相統し今の清水氏は也。

三つ巴を定紋とす、中頃より二本杉に改めしは豊後の日向杉に表してなり。

清水と変名の事は住所の南に山有り、切岸より清らかなる水涌出る傍に龍王弁天の社有て是を守護す。則ち地名を清水と云へり。

と記されており由緒の内容は一樣ではない。この一族は大神姓佐伯氏の伝承を持ちながら、その出自は不明で、おそらく後世の人々によつて模索された結果だと思われる。

五、山津村大庄屋墓地

大庄屋の所在地は確認していなかったが、桃園史談会との交流があり、当会員から「清水家墓地調査」と写真が送られてきた。大庄屋跡の現当主は他人の詮索を嫌って立ち入りを拒んでいるという。

現地は千歳役所跡・千歳天満社を下って西に向かった山津村の山裾にあり、宅地の奥に五五基の墓石類が並んでいる。墓石の中に佐伯作左衛門の名も見えたが、一番奥まったところに元祖墓が祭られている。

墓の様式は江戸中期以降のもので、佐伯氏の家紋左三巴の下に

●芳英院殿城山督春大居士 天正五年丁丑九月十二日

●大應院殿英岳道雄大居士 同 九月十八日

●梅林院殿花山惟香大居士 同 九月十七日

と三人の戒名が刻まれ、その隣の墓石には

千時 天正五年丁丑九月日

●空三居士随侍等四霊之贈塔

日州於美々之陣忠戦死畢

とあり、日向耳川合戦に戦死した一族郎党を祭る設定になっているが、耳川合戦は天正六年（一五七八）のこ

とで年号を誤っている。その続きにこの地に定住した元祖と思われる夫婦墓が立っている。

●仙寿院殿長菴惟久居士

慶安三庚寅年四月十六日 （一六五〇）

●光林院殿松嶺妙樹大姉

万治三庚子年十二月廿九日 （一六六〇）

慶安三年は初瀬井路の功労者清水与兵衛の亡くなった年でもある。これらの元祖墓は後世の子孫が先祖供養のために造立したものとと思われる。

また墓石群の中に蓮華台の上に唐破風の屋根を頂いた立派な墓塔があった。上の唐破風に左三巴、下の唐破風に菊紋、蓮華式台には十字紋が浮き彫りされている。

●圓應融禪定女

明和四丁亥天六月廿六日 （一七七七）

右は後に大庄屋を継承した清水友八郎基寛の母の墓と思われるが、友八郎は陀羅尼經を一石一字に書写し同年九月に宝篋印塔を造立し、碑銘に大神姓清水基寛と刻んでいる。また天明二年（一七八二）先祖供養のため墓地の入口に大乘妙典一石二字塔を造立し、その上に十一面観音菩薩を安置した。



(清水大庄屋墓地と先祖墓)

●法名海卯良光居士、俗名清水友八郎基寛

寛政十年（一七九八）三月晦日没、寿五十四歳

延享元年（一七四四）に生まれた清水友八郎は信仰心厚く一族中興の祖とされている。

六、清水氏の手がかり

清水一族には詳細な系図は伝わっておらず、先の伝承を整理すると、元は大神姓佐伯氏であったが戦国末期に落人となり清水と改姓した。山津村大庄屋となり江戸中期頃までは佐伯姓を名乗り、江戸後期には再び清水姓に復したということである。

清水氏が江戸初期から山津村の大庄屋を継承してきたこと、一族から日根野府内藩士清水与兵衛を輩出した経歴から、戦国時代には名のある武将であったことが推察される。しかし、大神姓佐伯氏系図にその手がかりはない。そこで清水姓について「大分県史料・大友文書録」等によって抽出してみた。

①義統公高麗陣着到衆交名 文禄元年 清水半内允

②朝鮮国戦死・病死者交名 文禄二年 清水玄蕃

③ 同右 於筑後柳河 清水藤左衛門

④ 同右

堺にて 清水周防入道

⑤ 山口着到衆交名

文禄三年 清水主計入道

⑥ 大友中庵御供下向衆交名

同右 清水半内

右は大友吉統に随つて朝鮮に出陣した武将名であるが、
⑤⑥は文禄二年（一五九三）豊後改易後に吉統に随つて山口から江戸へ下向しているのので、吉統直属の家臣と思われる。

また朝鮮に出陣して戦死・病死した②③④のうち筑後柳河で没した清水藤左衛門のことが気にかかった。というのは以前調査した大野郡藤浪の佐伯氏は柳川と関わりある一族で、伝承のあり方が山津村の佐伯氏とよく似ていたからである。

七、柳川藩の佐伯氏と清水氏

大友宗麟の時代、大野郡藤北の鎧ヶ嶽城主に戸次鑑連よらいがだぢという猛将がいた。甥の鎮連しげつらに家督を譲り、自らは宗麟の命で筑前立花城へ赴き立花道雪と名乗った。このとき戸次氏の家臣団も親子兄弟で豊後と筑前に分かれて随従することになった。

道雪の跡を継いだ立花宗茂は、秀吉の九州平定後の天

正十五年（一五八七）六月、筑後国内に四郡（十三万石）を拝領して柳川に入った。当時の家臣団編成は左（次ページ）の通りである。

左の佐伯善左衛門は与力二〇名を抱えた侍大将である。大野郡藤浪の「佐伯氏系図」では藤浪佐伯氏の先祖図書惟光が善左衛門と従兄だと記しているから、親同士が兄弟で筑前と豊後に分かれたことになる。

左の清水藤右衛門は先に柳川で病死した藤左衛門とは別人であろう、「慶長元年（一五九六）石高帳」にはどちらの名も見当たらない。この清水藤右衛門は元亀二年（一五七二）立花道雪が和睦のため宗像氏貞の娘伊呂姫を側室に迎えたとき、輿添として随従した武士の一人である。伊呂姫の菩提を弔う藤右衛門の子孫清水家が今も古賀町石瓦に在住しているという。

また柳川藩の「御家中系譜・佐伯氏系図」（次ページ）によると、佐伯善左衛門の妹が清水藤右衛門に嫁いでおり、右二人は義兄弟という関係にある。そのほか与力頭に清水藤兵衛なる人物名も見え一族かと思われる。

『朝鮮御陣備書附』文禄元壬辰年（一五九二）

高

五千石

小野和泉(鎮幸)

四千石

立花三河入道(賢賀)

三千五百石

立花三左衛門(鎮久)

三千五百石

由布七右衛門(惟次)

三千五百石

立花織部(親家)

式千五百五十石

三池伊兵衛(親家)

式千石

吉弘嘉兵衛(統幸)

式千石

矢嶋才介(重成)

二千石

小田部新介(統房)

千五百石

原尻宮内少(鎮実)

千五百石

内田忠兵衛(統統)

千三百石

十時撰津(連貞)

千三百石

佐伯善左衛門(惟幸)

千石

大鳥居名代

千石

小田勝左衛門

千石

清水藤右衛門(連元)

千石

立花新右衛門(親勝)

千石

安東彦右衛門(常久)

(以下略)

『御家中系譜』に載っていた柳河藩士・佐伯家の系図。(柳川古文書館所蔵)
先祖父々事大友家

惟綱 喜三兵衛

惟幸 善左衛門、宗茂公朝鮮御渡海御供仕と云。千三百石とあり。
安東土佐俊信妻
清水藤右衛門連元妻

女 田尻左右介惟光妻

惟益 弥三兵衛

惟光 藤左衛門、心海。母、小野弥六兵衛女。

惟久 藤左衛門。母、西原勝右衛門種直女。

為光 勘兵衛。城平左衛門養子となる。

惟貞 惣介。田尻新右衛門惟吉養子となる。

女 小野忠三郎幸久妻
山本勘右衛門鎮知妻

惟末 平六、早世。母、矢部七郎左衛門長安女。

女 安武又六重振妻。

惟致 安右衛門。実は城勘兵衛為光四男。

惟安 喜三兵衛

惟重 三郎介、喜三兵衛。

養母、町野三吉女。喜市郎、喜三兵衛、弥三兵衛。実は三池吉兵衛讓信一男。

(柳川藩御家中系譜)

八、立花宗茂の改易と再封

その後の柳川藩・立花宗茂は、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原合戦に敗軍の将となって、柳川を改易され上方で浪牢の身となった。

残された家臣団の大半は肥後藩・加藤清正の預かりとなり、後に清正に仕官したものは二五〇余人あったといふ。また他家へ転任したものの、帰農したものも多くあった。

宗茂は慶長十一年（一六〇六）奥州南郷に所領を宛がわれ同十五年には三万石を領するに至った。慶長十九年（一六一四）の大坂冬の陣、翌年の夏の陣には秀忠に従軍し、元和二年（一六一六）には將軍家の「御嘶衆」^{おほみしよ}に選ばれ忠勤を励んだ。

元和六年（一六二〇）八月、筑後一国を領していた田中忠政が江戸で没し後嗣がなく改易された。立花宗茂の再封が決定されたのは十一月、柳川城へ入城したのは翌年（一六二二）二月二十八日だった。

豊臣期の十三万石には及ばないが、三万石の大名が一挙に約十一万石となった。再封後の家臣団編成は、奥州南郷時代の侍、方々へ浪人していた譜代の家臣、やむを

得ず採用した新規の者、肥後加藤家からの帰参組によって形成された。

このとき佐伯善左衛門の孫・喜三兵衛惟之も肥後から帰参したと思われる。しかし二〇年の歳月は、待つ身には長すぎた。一族郎党は離散して既に新しい生活基盤を築いていた訳である。

九、おわりに

「清水家墓地調査」を送ってくれた薬師寺氏が「肥後の赤石で作られた墓石がある」と、言っていたのを今思い出した。それは清水友八郎基寛の墓である。今のところ柳川藩と山津村の佐伯・清水氏を直接結びつける資料は得ていないが、大神姓佐伯氏を称し清水姓にもこだわった一族の事情を考えると、柳川藩士佐伯氏の系譜が気にかかる訳である。

参考文献

「大分県史料」「大分市史」「大分歴史事典」

「大分県地名大辞典」

「岡のあゆみ・桃園地区のあゆみ」

「初瀬井路物語り」「炎の軍扇立花道雪」「立花宗茂」